

三郷町市民劇団 脚本 2009

# 荷車の上の権兵衛

松本大志郎

権兵衛

平城山

田原本

畝傍

平群ミサト

ミサトの母

凍えそうな寒い日の夕方。

リヤカーを引く中年男（平城山）。そのリヤカーには沢山のガラクタと共に、一人の青年が乗っている。

平城山 「(歌って)カラスが鳴くから帰ろう……。か。そうしましょう……。か。(折れた煙の吸殻で♪の出で) 帰るお家は藪の中……。藪の中じゃねえか、橋げたの下の原っぱでだな。」

権兵衛 「へたっぴい」

平城山 「うっせえ！人が機嫌よく歌ってるのに文句つける奴があつか。」

権兵衛 「うっせえ！うっせえ！ペコペコ腹。ペコ！」

平城山 「ホントうるせえなあ。お前は一日中、俺が引くリヤカーに乗っかってるだけだろうが。普段、俺が話しかけてもそっぽ向いて応えもしない癖に、腹減った時だけそうやって……。だいたい、良心でもんがないのかね？この不景気で拾えるもんも少なくてイライラしてる俺に、慰めの言葉をかけたりだとか、しないかね？せめて、何か嗅ぎつけて、あっちにお宝が！とか言って……。」

権兵衛 「(思い切り鼻をすする)」

平城山 「そっか、鼻炎持ちだったな。ブタクサの草むらの中で思い切り深呼吸なんかするからだよ。だから余計酷くなるんだよ。無知するのは馬鹿だよ、まさしく。鼻の中から草が生えても筆ってやらねえからな。」

権兵衛 「(平城山の腕に噛みつく)」

平城山 「イテテテエ！何も噛みつくことはないだろう！自分の気に入らないこと言われたら、すぐ噛みつく！一回俺が噛んでやろうか？お前の首根っこ！まだ、痕残ってたかな！」

しばし揉み合う二人。  
するとすぐに平城山の腹が鳴る。

権兵衛 「グウウ。ハハハハ、グウウ。」

平城山 「馬鹿野郎。お前の相手してたら、余計に腹が減っちゃまったじゃねえか。」

権兵衛 「帰ろう帰ろう。ペコペコ腹ペコ。」

平城山 「ああ、帰る。帰るよ。だからって、お前の言うこと聞いて帰るんじゃないからな。自分の意思で帰るんだから俺は。お前は勝手にそれについて来てるだけだからな。それにしても・・・。」

再び、平城山の腹が鳴る

権兵衛 「帰ろう！」

平城山 「よし、帰ろう！」

OP曲（軽快な音楽がいいか？皆で歌えるような。）

平城山の仲間たち（畝傍と田原本） 登場し、歌い踊りながら場転とか？

## 2

平城山たちの住処？寝床？

雨風しのげる橋げたの下で、各々の住みよいように作られている。

平城山はホームレスである。って、分かってるか（笑）

平城山 「ただいま。」

畝傍 「雪は降るう〜♪あなたは来ないい〜♪」

平城山 「おっ！ウーさん、今日はごきげんだねえ。」

田原本 「平城山。ごきげんにも程があるよ。さっきからずっとこの調子なんだから。しかも、ずっと同じとこばっかり。」

平城山 「そう言えば、いつもより感情がズドンとこっちに来る。∴特に顔。」

田原本 「なんでも、いつも懐が温かくなったら通ってた青空カラオケが、市の条例違反だか何  
だかで強制的に撤去になったらしくって、それで。」

一層、感情と歌唱が比例して大きくなる畝傍

権兵衛 「(両手で耳を塞いで)へったっぴ！お前よりへたっぴ！」

平城山 「おいっ！」

田原本 「あら、あんたまだこのヘンテコ連れてんの？殊勝なことだねえ。あたしなんか一人で  
も食べるのやっとなのに、よくやるねえ。」

平城山 「俺も好き好んでじゃないよ。愛想はないし、気に食わないことあったら噛みつくし。」

機嫌良く渡された食料を食べる権兵衛

田原本 「じゃあ、どうしてよ。」

平城山 「え、前に言わなかったっけ。川向うの町で何かないかブラブラ探し回ってた時に、ち  
ょうど大雨が降る前の日の夕方、公園の片隅の草っ原でなんかヒジキかコンブかワカ  
メみたいなものがあるんじゃない。で、これは食料になると思ってひっこ抜こうとした  
ら、こいつの頭だったってわけ。一瞬、グハッって言っちゃったよ。マンガの吹き  
出してみたいにグハッって。それで、えらいもん見つけちゃったなと思って引き返そう  
としたんだよ。そうしたら、足がきかないらしくて、腕だけでこうやって(やってみ  
せる)俺に近づいてきたんだよ。」

田原本 「ホラーだね。」

平城山 「ホラーだった。ちよっとチビッたし。」

田原本 「汚え！」

平城山 「ちゃんとパンツは洗ったよ！パンツは！そんなことは、どうだっていいんだよ。それ  
で近寄ってきて、このクリンとした目で訴えてきやがってよ、しかもちよっと潤ませ  
て。そうしたら、もう乗つけるしかないじゃない。雨が近づいてるのも分かってたし、  
乗つけてやるしかないじゃない。雨に打たれて病気で死んで、化けて出られた  
ら困るだろ？だから仕方なしに、一晩だけ凌がしてやろうと連れて来てやったら、居  
ついちまったわけ。今思うと、目が潤んだのは、たぶん鼻炎のせいだったんだ  
けどな。」

いつの間にか、権兵衛に向かって熱唱する畝傍  
迷惑そうにする権兵衛

田原本 「それ聞いたね。丸まんま同じ話。」

平城山 「おいおい、なんだよそれ。それだったら早く言えよ。」

田原本 「見事に、マンガの吹き出しみたいにグハツとか、ホラーみたいに近寄って来たところも。ちよつとチビツたつていう件のやりとりも、そのまんま。」

平城山 「恥ずかしいだけじゃないかよ。」

田原本 「平城山いつ気づくかなって思いながら聞いてた。そうしたら、丸まんま同じ話するかちよつとビックリした。」

平城山 「もう話さねえ。お前に何聞かれても話さねえ。」

田原本 「ところで、なんでこいつ権兵衛なの？」

平城山 「拾ったは良いけど、名前もなんもわかりやしねえから、一応つけてやらんといけねえけど、面倒臭いし、名なしだから『名無しの権兵衛』から権兵衛。」

田原本 「はあ、単純。っていうか、言ったそばから忘れてんじやん。」

平城山 「あ、ちくしょう！」

突然、畝傍の悲鳴

見ると権兵衛が畝傍の喉笛に噛みついている

平城山・田原本 「うわっ！」

平城山 「こら！何してんだお前！（引き離す）」

田原本 「危ない危ない。いくら迷惑だからって、ここで殺人は御免だよ。離れたところでやつとくれ。」

平城山 「そういうことじゃないだろ。大丈夫か？ウーさん。」

畝傍 「ウーウーウーちよつとだけ、小川とお花畑が見えた。」

田原本 「ギリギリだったんだね。」

権兵衛 「(嬉々として)ギリギリ。ギリギリ。」

平城山 「テメエ！この野郎！なに楽しそうにしてんだ！人一人殺そうとしていたんだぞ。もういい、テメエなんか前いたところに捨ててきてやる。(リヤカーを動かそうとする)」

田原本 「ちよつちよつちよつ！待ちなよ。そんな無下にするんじゃないよ。」

平城山 「無下にするって。こいつはウーさんの喉喰いついたんだぞ。そんなの昔テレビでやった『野生の王国』ぐらいでしか観たことないぞ。肉食獣が草食動物を襲う時のアレみたいなの。」

田原本 「アタシも生で観たのは初めてだよ。だけど、アタシがああ状況なら躊躇いなく鈍器でウーさんの頭から割ってたわよ。」

平城山 「え？」

田原本 「耳元でずっとガーガー歌われてんだもん。権兵衛相手に良かったねってくらい。ねえ、ウーさん。」

突如、嗚咽をあげて泣き出す畝傍  
真似をする権兵衛

田原本 「あら、忙しいわね。お歌の次は号泣かい。付きあつてられないよ。」

平城山 「止めとけて。」

畝傍 「うるせえ！田原本のババア！お前は所詮、俵だよ俵！俺の気持ちがあつてたまるかってんだ！」

田原本 「言っとけ！訳がわからんわ！」

平城山 「ウーさん。俺もわけが分からんよ。なにがあつた？青空カラオケにそんなに思い入れがあつたんかい？」

思い出して、また号泣する畝傍

田原本 「(リヤカーごと権兵衛を畝傍に近づけて)ほら、やれ！」

畝傍 「ヒイツ！」

平城山 「(間に入って) ああもう、堂々巡り！(権兵衛の額をはたき) お前も一緒になってんじゃねえよ。ウーさん、俺が聞いてやるよどうした？」

畝傍 「喉大丈夫？穴開いてない？空気漏れてピーピー鳴ってるような気がするんだけど。」

平城山 「大丈夫だ。声が上がってるだけだから。」

畝傍 「そう。ちょっと期待したんだけどな。押さえる場所によって音階が変わったりなんかしたら・・・(喉に触れる)。ヒイツ！血っ！(手を見て) ゲッ！唾・・・。気持ち悪い。そんなことじゃなかった。もう、俺は今後どう生きていったらいいかわからないよ。と言うか、いつそのこと殺されれば良かったかも。」

ガタツつとリアカーが動く音

畝傍 「ヒイツ！」

平城山 「おい！」

田原本 「ちよつと邪魔だったから動かしただけじゃないか。それに、殺されれば良かったかもなんて言うんだったら、そんなにビビることないじゃないの。」

畝傍 「あの殺され方だけは嫌だ！ものすごく苦しくて怖かったんだぞ。死ぬんなら、コロッと苦しまず一瞬で死にたいんだよ俺は。」

鈍器を真顔で振り上げる田原本

畝傍 「ヒイツ！」

権兵衛 「(嬉々として) ヒイツ！」

ケタケタ笑う田原本と権兵衛

田原本 「アタシたち気が合うねえ。よく見りや、あんた可愛い顔してんじやない。(なんだか和気あいあい)」

平城山 「話が前に進まん！」

三人 「ゴメンサイ」

平城山 「いや、ウーさんは良いんだよ。この馬鹿二人が……。で、どうしたんだよ。」

畝傍 「ん？………忘れた。あれ？なんだったっけ？」

田原本 「青空カラオケが撤去になったからじゃないの？」

畝傍 「ああ、そうだった。聞いてくれよナラやん。俺の唯一の憩いの場が……ウウウウウッ……。」

平城山 「いつかの新聞に書いてあったなあ。そうか、ウーさんが通ってたところだったんだな。」

畝傍 「ウウウウッ……毎日毎日、あそこに行くために地べた這いずり回って働いて、手元に少し余裕ができたなら、今日行こうか明日行こうかと楽しみにしてた場所なんだよ。別に歌いたいだけじゃなかったんだよ、俺の目的は。青空カラオケ略して『青カラ女王』のみちこさんに、もう会えないと思うと、何の為に生きていたら良いか……ウウウウウッ。」

田原本 「なんだ、目的は女かよ。」

平城山 「そんな、みちこさん死んじゃったわけじゃないんだし、いつかまた会えるって。それこそ、どこか空の下で歌って……。」

畝傍 「本当に楽しかった。運よくデュエットした時なんか、もうそれこそ彼女が吉永小百合で俺が橋幸夫のようだった。時には樹木希林と郷ひろみ。フニフニフニフニ。」

田原本 「誰が郷ひろみだって？」

権兵衛BGMのように鼻歌を歌いだす

畝傍 「程よいところで二人見つめあって、情感込めて歌い上げるんだ。……それがもうできないと思うと……。」

平城山 「若干複雑だけど、気持ちはわかるよ。……わかる。」

畝傍 「って話をしようと思ってたんだけど、どうでもよくなった。」

平城山 「へっ？」

畝傍 「あれえ？なんでだろ？」

田原本 「ホントこいつは訳が分からないよ。」



平城山 「なにこの感じ。小便してたら思いがけず長くて戸惑ってたんだけど、なかなかこれはこれで気持ちいいぞと思えたところで、終わっちまったみたいな。」

田原本 「なんだよ、肩透かしかい？あんたまで訳の分からないことを。」

平城山 「ん？なんと言うか、こう微妙なニュアンスなんだけど、こうバームクーヘンを側から歯で削ぎながら食ってみたけど、何も期待はしていなかったのに期待はずれだったみたいな。」

田原本 「はあ？」

畝傍 「それ！それだよナラヤン！そんな感じ。」

田原本 「いやいや、二人は明らかに違う地点にいるんだと思うんだけど・・・ダメだ、なんか熱っぽくなってきた。」

依然、一人鼻歌歌う権兵衛

なんとなく、それに引かれる三人

三人 「どうでもいいか。」

平城山 「なにモヤモヤとしてたんだろ？」

田原本 「さあ、なんだっけ？」

畝傍 「皆そろってジャクネンセイケンボウショウ？」

田原本 「それは、アンタだけだ。」

畝傍 「そうだよね、若いのは俺だけだしね。」

田原本 「コロッと逝かせてやる！」

権兵衛 「いいの。」

三人 「ん？」

権兵衛 「いいの。いいの。」

三人 「・・・いいか。」

しばらくの間

畝傍 「あつ！あつ！あつ！あつ！」

平城山 「ビックリした！なんだよーやん、いきなりデカイ声で。」

田原本 「樹木希林でもいたかい？」

畝傍 「そろそろスーパーで惣菜が半額になる時間じゃない？ちよつと行ってくる！（いそいそと出かける用意）」

田原本 「あつ！それアタシも乗った！（出かける用意しだす）そうだ、ナラやん。なんか綺麗めの上着かしてくれない？もうアタシの服じゃ汚れすぎて中には入れてくれないからさ。」

平城山 「ちよつ！勝手に人の寝床漁るんじゃねえよ。貸してやるから。」

田原本 「サンキュ。あつ、裸のオネエちゃんの写真ばかり。」

平城山 「ピーーッ！！（痲癩みたいなの）」

畝傍 「ヒイツ！やっぱり喉に穴開いてるうっ！？」

田原本 「ごめんごめん。健康で結構！」

平城山 「馬鹿野郎！どうでもいいけどよ、上着の一枚くらい買えよ。本当は持ってるんだろ？（手で金のサイン）」

田原本 「ん？何のこと？金あるのに好き好んで乞食してる馬鹿がどこにいるのよ。」

平城山 「それならそれで良いんだけどな。」

畝傍 「もう！どこにも穴なんて開いてないじゃないか。驚かせるなよ！」

田原本 「馬鹿じゃない。穴なんて開くわけじゃないじゃない。勝手にアンタが勘違いしただけでしょ。」

平城山 「ピーーッ！！」

畝傍 「ああ、もうややこしい。それもこれも、お前がこんなとこ嘯むから・・・って、寝てやるよ。」

田原本 「人のせいにすんじゃないよ。アンタの頭の中の問題だろ？しかし、こつから上は（眉から上を指して）オッサンなのに寝顔も、なかなか可愛いじゃない。（平城山に）ねえ、飽きたら頂戴な。」

平城山 「飽きたらって、俺は別に可愛がつてるわけじゃねえよ。仕方なしだって言つたら？それに、玩具じゃないんだから簡単に『やる・やらない』の話じゃないだろうに。」

田原本 「あく真面目腐っちゃって。分かってるわよ。冗談よ冗談。一人食べていくので精一杯だからね。それに、ここを追い出されない限り皆でこの子を飼っ・・・」

畝傍 「ちよつと、行くの？行かないの？もう、放っていくよ。早く行かないと良いのなくなっちゃうんだから。」

田原本 「はいよ、行くよ。（平城山に）アンタは行かないのかい？たまには行ってみなよ。いよ。既製価格で買うのが馬鹿らしくなっちゃうよ。」

平城山 「いや、俺はいい。」

田原本 「アタシ良い作戦知ってたよ。あそこのスーパーは自動的に8時になったら半額になるみたいで、要はそれまでに籠に入れて、8時回ったらレジに直行っていうね。だから誰よりもいい商品を半額で買えるっていう・・・。」

平城山 「良い作戦だけど、俺は行かないよ。」

田原本 「やっぱり夜は外に出ないんだね。」

畝傍 「もう待ってらんないから行くからね。」

田原本 「待ちなよ、行くって。（平城山に）じゃあ、行ってくるからね。お土産なんて乞食に期待すんなよ。」

平城山 「するかつ！（ぼそつと）夜というか、夕方と夜の間・・・」

期待膨らみ楽しげに離れていく二人

田原本 「アンタ、カラオケ代浮いたんだから、ちよつとはおごりなさいよ。」

畝傍 「なに言ってるの。1週間分買いだめなきや、今度いつ買えるか・・・。」

田原本「馬鹿、そんなに買ったたら冬でも腐るよ。」  
とか何とか、やりとりしながら離れていく。

平城山 「はぁ……。腹減ったな。そうだ、飯食ってなかったな、まだ……。うわっ！こいつ俺の分まで食ってやがる……。この野郎！馬鹿や……。(寝顔を見て、何かを思い返しながら辺りを見回して) はぁ……。まだ早いけど俺も寝るか。あ、やつら帰ってきたら、だいぶご機嫌だろうな。(新聞でバカでかい耳栓を作って耳に入れる) これで良しと。」

3

ある家庭の一室

平群ミサトは一人部屋で静かに泣いていた

時折、何か玩具のようなものを撫で、時に抱きかかえ

ドアをノックする音

ミサトの母 「ミサト、お夕飯よ。そろそろ……。」

ミサト 「(首を横に振る)」

ミサトの母 「そんなこと言わないで、ねえお願い。あなたここのところ、ろくに食事していないじゃないの。」

ミサト 「(先程より、強く首を横に振る)」

ミサトの母 「あなたの気持ちはわかるわ。でもね、あなたが悪いんじゃないの。それに、あなたが倒れてしまったら、あの子だって絶対それを悲しむわ。そうでしょ？」

ミサト 「嫌よ。あの子のことを考えたら食事なんて喉を通らないわ。だってそうでしょ？あの子がちゃんと食事しているって言えないじゃない。毎日ちゃんと欠かさず食事を与えていたのに、あの日からそれがなくなってしまったのよ。私のせいだ。」

白杖を固く握るミサト。

彼女は盲目のようである。

ミサトの母 「あなたのせいなんかじゃない。元を正せば、お母さんが……。とにかく、お母さんの言うことを聞いてちょうだい。あなたをこれ以上辛い目に会わせたくはないの。後で食事を部屋に持ってくるから。お願いだから少しでも食べてちょうだい。」

ミサト 「・・・ええ。」

その言葉を聞いて安心したか、母は部屋を出ていく

ミサト 「私の馬鹿！お母さんまで困らせてしまつて。そもそも、あの時私があの子と喧嘩なんてしなければ、こんなことにはならなかったのに。今ごろどうしてるかしら・・・。」

思い出の歌なのか、歌を歌いだすミサト

(劇中歌)

この道を歩いていこう  
向こうの山のそのまた向こうへ  
この道を歩いていこう  
頂上越えたら次の頂き  
太陽の日差しを浴びながら  
茂る緑の息吹感じて  
時には、あなたと笑いながらね  
広い海を目指して歩こう  
この道を

白杖を投げつけるミサト

そこには乾いた音が虚しく響くだけだった

4

権兵衛 「ブエ〜ツクション！ブエツクション！（鼻水すすする音）ズズズズウ〜」

平城山 「ブエ〜ツクション！ブエツクション！（鼻水すすする音）ズズズズウ〜」

田原本 「あらあら、親子そろつてお風邪を召されたんでございますか。仲がいいこつて。」

平城山・権兵衛 「誰が親子だよ！ブエツクション！」

畝傍 「出た！お約束の同時発話。」

平城山・権兵衛 「なんで、こんな奴と・・・。」

田原本 「ハアーツハツハツハツハア〜。こりや、見事。しょうがないこつたね、二人とも諦めな。一か月も四六時中一緒にいたら、そうなるつてもんよ。」

平城山 「そういうもんかねえ。」

田原本 「そういうもんだよ。よく言うだろ？飼い犬は飼い主に似るって。」

畝傍 「へえ〜。」

権兵衛 「飼い犬なんかじゃないやい！」

田原本 「あらら、こりゃ失礼。」

平城山 「なんだよ、田原本のババアもこいつの話す言葉分かるようになってきてんじゃねえか。」

田原本 「ほんと、慣れてきたみたいだね。あんた達と一つ屋根・・・橋の下で暮らしてるんだから、必然っちゃあ必然か。」

畝傍 「え？そうなの？」

田原本 「アンタは見た目に違わず、鈍いからねえ。(権兵衛と平城山に) あんた達、だからって移さないでくれよ、風邪。」

平城山 「おっ、そう言えば風邪は誰かに移すと治るって話だよな。(権兵衛と何やらアイコンタクト)」

田原本 「え？ちよつと待っておくれよ。なにを・・・」

畝傍 「助太刀いたす。」

権兵衛・平城山 「ゲホゲホヘックション(などなど風邪の諸症状を田原本に向け責め立てる)」

さながら、親子か兄弟のように楽しみに田原本にじやれる

田原本 「もうやめなよ、ホントに移るよ。」などと言いながら暴れる

自分も被害にあう位置にいることに、やっと気付いて。畝傍「しまった！」

途中から二人して逃げ回る

平城山 「ハッハッハッハッハア、コホコホ。ちよつと楽になったかも。」

田原本 「もう、シヤレにならないよ。顔に唾かかちやっただじゃないのさ。(畝傍に) アンタも、こういう時だけ勘が冴えるんだから。」

畝傍 「なに言ってるんだよう。俺も被害者。」

田原本 「馬鹿じゃないの。」

権兵衛 「ブエ〜ツクション！」

平城山 「あれ、お前まだ駄目なのか？俺はホントにちよつとマシになったのになあ。よし、それからもう一丁やってやれ。」

田原本 「勘弁してくれよ。この子、体も小さいし（頭を指して）この辺なんか吹きっさらしだから、寒さに弱いのかも知れないよ。」

権兵衛 「（噛みつかんかの勢いで）うっせえ！ほっとけババア！」

田原本 「アハハ、ごめんごめん。」

権兵衛 「ブエ〜ツクション！（フラフラとしだす）」

平城山 「おい、大丈夫か？ババア、病人の血圧を上げる奴がいるか？」

田原本 「いや、そんなつもりで言ったわけじゃ・・・。」

平城山 「そんなつもりなかったって、結果こうなってんじゃねえかよ。ああ・・・半目で起き上がりこぼしみたい揺れてやがるよ。」

畝傍 「（若干かっこつけて）ここは、僕に任せてくれないか？」

二人 「え？」

畝傍 「大丈夫。（権兵衛に対面し、顔など色々触診して）ふむふむ。なるほど。鼻の中はと・・・。」

平城山 「鼻は、ずっとこいつ鼻炎だったから・・・ウーさん治せるんなら、ついでに治してやってくれよ。こいつに、もしものことがあったら・・・。」

畝傍 「心配するな。」

田原本 「しかし、人は見た目に依らないって言うけど、まさかウーさんがこんなに頼もしく見える時が来るだなんて、思ってもみなかったよ。もしかして、ホームレスする前はそれなりの仕事か勉強してたのかい？」

畝傍 「そう、歯科学だけ。」

平城山 「へーそうなんだ。見なおしたなあ。」

田原本 「これはこれは、大層なお勉強を・・・。」

二人十権兵衛 「歯科学!？」

平城山 「歯科学って、あの歯科学?歯医者の方?」

田原本 「ちよつと聞き慣れない言葉だったから、一瞬分からなかったわよ。」

畝傍 「大丈夫、医学に近いはずだし、小さいころから父さんの施術見てきたし。」

平城山 「いやいや、歯医者の方範疇じゃないだろうに。親子で歯医者だったのは感心するけどさ。」

畝傍 「俺は歯医者には成ってない。歯医者は親父だけ。」

平城山 「ただの素人じゃねえか!気持ちには有難いけど、止めてくれ。」

田原本 「止めときなつて。悪いこと言わないから。」

畝傍 「大丈夫、大丈夫。ほらほら、どこが悪いんだろうねえ、診てあげるからねえ。」

畝傍、権兵衛の口を開けさせ診ようとする

権兵衛、朦朧としながら畝傍の喉笛に食らいつく

畝傍 「ピーーッ!」

田原本 「ほら、言わんこつちやない。」

ボタンと倒れこむ権兵衛

平城山 「おい、大丈夫か?なにやってくれてんだよ。」

畝傍 「俺はただちよつとでも役に立ちたくて・・・。」

平城山 「(額を触って)熱いつ!すごい熱だ。こういう時はどうすんだ?氷嚢か?いや、クシヤミしてたしなあ。そもそも、氷嚢なんて持ってないし。」

田原本 「ガタガタ震えてるよ。寒いんじゃないかい?」



平城山 「温かくしてやろう。とにかく温めてやろう。毛布か何か貸してくれないか？」

田原本 「はいよっ！（畝傍に）アンタも手伝いなさい。」

それぞれに毛布やら上着やら持ち寄り、権兵衛に掛けてやる

平城山 「これで大丈夫だろうか？」

田原本 「どうだろう？まだ震えてるけど。」

色々考えた挙句、権兵衛の背中に回り、一緒に毛布にくるまる平城山

畝傍 「なにやってるの？」

平城山 「俺の体温は三十六度五分だ。・・・いや、ちよつと風邪気味だから三十七度ちよつとかな？ともかく、真夏の気温と同じくらいだから、これなら多少はさつきより温かいだろ。」

田原本 「それはそうだけど、ナラヤんからしたら熱すぎるんじゃないの？」

平城山 「俺はいいんだよ。雑草みたいに育ってきたんだから、多少は何があっても大丈夫だよ。現に、さつきまでしてたクシヤミなんて、どっかいつちまっただろ？」

田原本 「それはそうだけどさあ・・・。」

畝傍 「もう、汗びっしょりじゃない。」

平城山 「俺は大丈夫だって。こいつに、もしものことがあったら・・・寂しいじゃねえか。二人もそうだろ？」

田原本 「・・・ごめんね、アタシ達のせいだ。」

畝傍 「ゴメン。」

平城山 「ホントだぜ。勘弁してくれよな。熱いわ、しかし。」

田原本 「でもアレだね、本当の親子みたいだね。こう見たら。」

畝傍 「そう言えば、ウチの親父も俺が小さかったころ、こんな感じだったな。」

田原本 「アンタに小さかった頃なんてあったのかよ。そんなデッカイ体して。」

畝傍 「あつたんだよ。子供の頃は、『前に倣え』は腰に手を当てた派なんだから。でき、親父は寝込んでる俺の横に寄り添ってくれて、頭を撫でてくれてたんだよ。温かかったなあ。優しい暖かさというか、そんな感じだった。」

平城山 「そつか。そう言うもんなんだな、親子って。」

田原本 「そう言うもんなんだなって、ナラヤンには、そういう思い出ないの？」

平城山 「・・・ないんだな、これが。俺、親を知らないんだよ。施設と親戚をたらい回しの半生よ。だから、家族ってもんも知らないんだよ。」

田原本 「でも、昔結婚してたって言ってたじゃない。」

平城山 「してたよ。だけど、家族がどんなのか知らないから怖くってさ。できちゃった結婚だったんだけど、自分に子供ができたってのは無茶苦茶嬉しかったんだよ。だからこそ、結婚もすぐにしたし。でも、いざ一気に家族ができるんだって考えると、なんだか怖くなってしまっただけ。漠然とホームドラマとかで理解はしてたんだけど、どう生きていったらいいのか、自分以外の人間の人生を背負うとか想像もできなくて。馬鹿だったんだよ、あの時の俺は。何週間か怖さに耐えながら暮らしてきたけど、ある日とうとう家に帰れなくなってしまっただけ。」

田原本・畝傍 「・・・。」

平城山 「いつも、俺は外が暗くなり出す前に帰ってくるだろ。あれはさ、実はそのせいなんだよ。」

畝傍 「どういうこと？」

平城山 「二人は夜が嫌だと思ってるだろ？ だけど違うんだ。夕方と夜の間に嫌なんだ。その時間になると、足早に家族のもとに帰っていくサラリーマンとか、温かい光の中に見える家族が談笑している影とか、嫌でも目に入っちゃまう。それを見ると何と言うか、胸がギュッと締め付けられるというか、辛いんだよ。」

田原本 「だから、そうなる前にここに帰ってくるってことか。」

畝傍 「俺たちには当たり前前のが、そうじゃないってこと・・・か。でもさ、ナラヤン。たぶん・・・たぶんだけど、今なりふり構わず、そうやって権兵衛を守ってやろうって

気持ちとか行動、それって家族を思う気持ちと同じような気がするよ。」

平城山 「え？」

田原本 「そう！そうだよ。アンタたまにはまともなこと言うねえ。ナラやん、アンタにはもう家族がいるじゃない。権兵衛という、かけがえのない家族が。そりゃ、法律的にとか血縁がとかではさ、そうとは言えないけど、でも結局は気持ちの問題なのよ。頭で考えて何が出来るってのもんじゃないはずよ。実際問題、家族ってなりゆきなんだから。何かの拍子に一緒に住んだりなんかして、人が増えたり減ったりして、そこに気持ちが生まれるだけのもんなんだから。ほら、アンタ達二人と一緒にじゃない。」

平城山 「家族か・・・。」

畝傍 「じゃあ、さしずめ俺達もひっくりかえって家族だね。」

田原本 「アンタは違うだろ。帰るところがある歯医者のおぼっちゃまなんだから。」

畝傍 「帰るところあるのかなあ？親父、歯医者辞めちゃったし。」

田原本 「どうして？」

畝傍 「歯医者も今は競争の時代なんだよ。街に一軒しかなかった時代は良かったんだって。だけど、あっちこっちにオシャレな新しい『何々デンタルクリニック』みたいなのができてきて、何を間違ったか、親父はそれに対抗して、ある日突然看板書き変えてカタカナ表記で『ウネビシカ』って。お客さんはアマゾンの珍獣みたいな名前の古びたウチには来なくなってしまって、親父はどうとうやる気を失った。」

平城山 「それじゃ、畝傍デンタルクリニックか他の名前に、また書き変えたらよかったんじゃないの？」

畝傍 「いやあ、それだけじゃないんだよね理由は。そんな意気消沈してる親父を見て、俺は思ったわけよ、『俺が歯科医になって、ここをまた立派な歯医者として立ち直らせるんだ！』ってね。」

平城山 「すごく立派な心意気じゃない。お父さん、さぞかし喜んだだろうな。」

田原本 「(平城山に) 話半分で聞いてた方がいいと思うよ。」

畝傍 「それがさ、甘かったんだよ。俺、歯医者ってそんなに大変なことだとは思ってなかったんだ。だって、勉強しなきゃなんないんだよ。また、てっきり歯医者の子供は歯医者

に成れるもんだと思ってたからさ。」

平城山 「はあ？」

田原本 「だから、言わんこつちやない。」

平城山 「でも、そんなにお父さんのことを思ってたんだったら、一生懸命勉強したら良かったんじゃないの？」

畝傍 「だって、小学校の頃から勉強なんてしたことなかったんだもん。」

田原本 「それは、歯医者の子供は歯医者になれると思ってたから？」

畝傍 「そう。だって、親父が小さいころから俺に『お前は将来、父さんの後を継いで立派な歯医者になってくれよ。』って言ってたんだもん。そりゃ、『うん』って返事したさ。元氣よく『うん』って。でも、結局成れないと知った時は、どうしていいかわからなくなって、家を飛び出す結果となった。」

田原本 『この親にして、この子あり』か。」

平城山 「・・・。」

畝傍 「そう言うババアはどうなんだよ。」

田原本 「アタシは・・・。」

平城山 「今、ウーさんが見ている姿は、世を忍ぶ仮の姿。(田原本に)だよな？」

畝傍 「ええ！悪魔だったの？どおりで・・・。」

田原本 「違うっ！どおりでって、どう意味だよ！」

平城山 「一緒にホームレスやってるのは仮の姿で、本来はホームレスじゃないって意味だよ。」

畝傍 「じゃあ、何？鬼？お化け？妖怪？どおりで・・・ぎゃーっ！」

田原本 「いちいち相手したら疲れるわ。」

畝傍 「ごめんごめん。ごめんちゃい。だから、教えて。」

平城山 「あのな、この人は実は……。」

田原本 「良いんだよ。アタシのことは。恥ずかしただけだから。」

平城山 「そんなことないだろ。立派な大学教授なんだろう？実は。」

畝傍 「ええ！そうなの？なんでまた、大学教授がこんなところに？ってか、だましたな、ババア！」

田原本 「騙したって人聞きの悪い。別に今まで聞いてこなかったから、言わなかっただけじゃない。」

畝傍 「でも、ナラやん知ってるじゃない。」

田原本 「この人は、アンタと違って勤がいいから色々気づいて、それで聞いてきたから答えたただだよ。それに、教授じゃなくて講師。たぶん、今ごろは籍はないんじゃないかな？」

畝傍 「不祥事？不祥事？男子生徒にセクハラ？」

田原本 「違うわ！喉笛食いちぎるぞ！」

畝傍 「(小声で) やっぱり妖怪……。」

田原本 「まあ、簡単に話すと大学では、地位社会学が専攻で、その中でホームレスを研究していて、潜入、実態調査をしていたらそのまんま居心地良くなって、抜け出せなくなつて今に至るって感じかな。」

平城山 「ミイラ取りがミイラに……か。」

田原本 「そう、それだけ。ただ、一つ言えることはホームレスの自由性は大きな社会的対価を払ってバランスを取らなくては、得られないものだということ。それだけは間違いないと言える。だから、もう戻れないの……まあ、嫌じゃないしね。良いんだけど。」

平城山 「難しいことはわからねえけど、要はここに居るつきやないってことだな。」

畝傍 「じゃあ、やっぱり俺たちは家族みたいなもんじゃない。ねえ。」

平城山 「そうなのかな。(と、権兵衛を見やる)」

田原本 「あら、眠ってる。よかったね、ナラやん。」

平城山 「ああ。・・・家族か。」

5

一人部屋で歌うミサト

どちらかというと、口から勝手に漏れるように歌う

情感込めてではなしに、思いでを反芻するなかのBGMのよう

この道を歩いていこう  
向こうの山のそのまた向こうへ  
この道を歩いていこう  
頂上越えたら次の頂き  
太陽の日差しを浴びながら  
茂る緑の息吹感じて  
時には、あなたと笑いながらね  
広い海を目指して歩こう  
この道を

一人どこかで歌う権兵衛

ミサトが歌う曲と同じメロディで

誰かに聞かせるように

いつしか、ミサトのそれとシンクロする

真っ直ぐに歩いていこう  
急がずゆっくり、ゆっくりと  
前向いて歩いていこう  
向こうの山のそのまた向こうへ  
澄み渡る空気を胸いっぱい  
生きるみんなの呼吸と共に  
時には寄り道もしたいけどね  
開ける明日が待ってるから  
歩こうよ

ハッと、何かに気付くミサト

ミサト 「そう、そうよ。」

そう言って、何やら身支度をしだすミサト

ミサトの母 「どうしたの？ミサト。」

ミサト 「探しに行くの。」

ミサトの母 「え？」

ミサト 「あの子を探しに行くの。」

ミサトの母 「探しに行くって、アナタ。何を言ってるの？悲しいけど考えてもみなさい、あの子は足が悪いのよ。まだ生きてるという確証は……。それに目が見えないあなたも、どこで離ればなれになったか分からない以上、探しようがないじゃない。ね？私たちも何週間も前に方々を探し回ったけど、見つからなかったんだから。そうでしょ？」

ミサト 「大丈夫、あの子は逞しいから。だって、わたしの身代わりに車にはねられた時も、帰って来たじゃない。私たちのもとに。それに、感じるの。あの子は私の目で、私はあの子の足。一心同体なのよ。きっと元気ではいるはず。そうよ、あの子は逞しいから。」

ミサトの母 「……。」

ミサト 「じゃあ、行ってくるね。」

ミサトの母 「ちょっと待ちなさい。一人じゃ危ないわ。お母さんも付いて行くから、用事を済ましたら一緒に行きましょう。」

ミサト 「いいえ、私一人で行く。あの子を感じながら探したいの。」

どこか明るい希望を見出したかのような表情で出かけるミサト  
恥ずかしげもなく声に出して名前を呼んだり、声を掛けられた人に尋ねる（マイム）

畝傍とすれ違う

不思議そうに観察する畝傍

そのまま二人は遠ざかる

田原本 「ねえ、その歌よく歌ってるけれど、何て歌なの？」

権兵衛 「知らない。でも、いい歌だろ？」

田原本 「そうねえ、なんか前が開けるって言うか、優しくなれるって言うか、元気にもなれちゃう、そんな歌ね。ウーさんの歌う歌とは全く違うわね。」

権兵衛 「一緒にすんなよ！」

田原本 「ごめんごめん。ねえ、もう一回歌ってよ。」

権兵衛 「いいよ。」

そう言って、頭から同じ歌を歌う権兵衛

そんな中、畝傍が帰ってくる

畝傍 「ねえねえ、さっきさ、あっちの方で……。」

二人聞く耳持たず、歌を楽しんでる

畝傍 「ちよつとお、聞いてよ。さっきね変な女の子がいたんだよ。」

全く無視な二人

畝傍 「もう、そうやって二人して俺を困らせて、後で笑う魂胆だろ？わかってるよ、いいってそういうのは。乗せられないよ。ほらね聞いてよ。ほらほら。」

二人の注意を引こうとする畝傍

田原本 「ああ、うつとおしい！もう、人がせっかく気持ちよくなってるどころなのに。もう一回、町をブラついといで。もしくは帰ってくるな。」

権兵衛 「帰ってくるな！」

畝傍 「なんだよ、その言い草。せっかく面白いもの見てきたから、その話をもっと面白く話してあげようと思ったのに。良いよ、別に俺は。ああ、残念だなあ。」

田原本 「ほほう、面白いものをもっと面白くして話してくれるって？それは面白そうだ。ぜひ聞いてみたいなあ。ねえ権兵衛。」

権兵衛 「そこまで言うんなら。」



畝傍 「そうかい？そんなに聞きたいかい。オッホン、では聞かせてあげよう。さっき、ここへ帰ってくる途中の道でえ、白杖ついたあ少女があなんかあカタカナっぽいことお叫びながらあ歩いてた。『シュビデユビデユワワア。シュビデユワエエ。』みたいな。何言ってるんだか。つつうか、何人だよって話だよなあ。笑えるだろ？」

田原本 「終わった？」

畝傍 「うん。面白いだろ？」

田原本 「(権兵衛に)面白かったかい？」

権兵衛 「スベリ具合が面白かった。」

田原本 「その点に関しては、同感。」

畝傍 「え？スベリ具合??」

田原本 「言うまでもなく、話自体は全く面白くはなかったぞ。畝傍クン。」

権兵衛 「その点に関しては、同感。」

田原本 「自分で笑いのハードルあげといて、ねえ。あり得ないね。」

権兵衛 「あり得ない。もう一回、街を回ってこい。」

畝傍 「なんだよ。二人して、そこまで言うことないだろ。」

ちょうどそこに、平城山が帰ってくる

畝傍 「ねえ、ナラヤン。面白い話聞かせてやろうか？」

平城山 「断る。」

畝傍 「ホント面白いんだって。聞かなきゃ損だよ。」

平城山 「断る。権兵衛、そろそろ行くぞ。」

田原本 「あら、どこに行くの？」

平城山 「川の向こう側に、こいつの病気に詳しいホームレスがいるんだってよ。そいつんとこ」

に権兵衛を連れて行って、足を診てもらおうかなと思ってさ。」

畝傍 「俺、ないがしろ？」

田原本 「大丈夫なのかい？」

平城山 「噂では、結構な凄腕らしいぜ。指は、過去にトラかなんかに噛みつかれて1本失ってるらしいけどな。何ていったかな？ムツなんとかゴロウとかいったけな。」

田原本 「でもさ、それはそれで謝礼とか要るんじゃないの？」

平城山 「まあな。」

田原本 「そっか、それでこここの朝早くから日雇いに出かけてたんだね。(権兵衛に)良かったねえ。優しい家族がいて。(平城山を囁し)羨ましいねえ。」

平城山 「そんなじゃねえよ。いつまでもリヤカーに乗せてるのが嫌になったんだよ。ほら行くぞ。」

そう言って、権兵衛をリヤカーに乗せ出ていく平城山

田原本 「気をつけていってくるんだよ。あら、なんだか本当の家族みたい。(畝傍に)ねえ、そう思わない？私が女将さんでナラやんが旦那、権兵衛は息子みたいな。ねえ。」

畝傍 「じゃあ、俺は何なんだよ。どうせ、うるさく吠える犬かなんかだろ？」

田原本 「枯れかけた観葉植物。」

畝傍 「とうとう動物以下……。」

田原本 「嘘だよ。そうねえ、同居してるムードメーカーの親戚あたりかしら。」

畝傍 「……はあ、よかった。ちよつと涙出そうになった。それにしても、ナラやん大丈夫かな？」

田原本 「何が？」

畝傍 「だって、もうすぐナラやんが言った『夕方と夜の間』だよ。」

田原本 「アンタってホントに鈍いねえ。ナラやんには、もう温かい家族がいるだろ。」

畝傍 「そっか、なんか照れるなあ。」

田原本 「アンタじゃない！」

7

町を歩くミサト。依然として「あの子」を探している様子。そこに、平城山と機嫌良く歌う権兵衛を乗せたリアカーが近づいてくる。権兵衛の歌に気付くミサト。足を止め周囲に耳を澄ませる。権兵衛の視界にミサトが入り、歌を止め身を潜める。その様子に気付かないのか、平城山は足を止めることはなかった。

8

橋げたの下

ミサト 「ストラビンスキー。ストラビンスキー。どこにいるの？」

畝傍 「ああっ！（田原本に）ババア、ババア！あの子！あの子だよ！『シュビデュビデュワア。シュビデュワエ』ほら、いたでしょ？」

田原本 「何それ？」

畝傍 「ほら、さっき俺が話してたでしょ？面白い話。」

田原本 「面白い話？知らない。それより、あの子なんだかアタシ達よりボロボロじゃない。（ミサトに）ちよつと、お嬢さん。どうしたの？」

ミサト 「（突然声をかけられ驚く）はい。・・・あの、私、私の大切な友達を探しているんです。・・・あの、誰ですか？ここは？」

畝傍 「俺、畝傍ってんだ。」

ミサト 「キヤッ！」

田原本 「（ミサトに）ゴメン、ゴメン。（畝傍に）馬鹿！彼女は目が見えないんだよ。そんなことしたら驚いちまうに決まってるんだろ。」

畝傍 「ええ！そうなの？」

田原本 「見りやわかるだろ普通。(ミサトに) ゴメンね驚かせちゃって。」

ミサト 「いえ、良いんです。よくあることですから。」

田原本 「アタシは田原本。ここに住んでる。」

ミサト 「え？私、知らない間にお宅にお邪魔してたんですか？失礼いたしました。すぐに……」

田原本 「大丈夫大丈夫。住んでるって言っても、タダの橋の下だから。家つてわけじゃないから。」

ミサト 「……そう、そうですか。」

田原本 「それで、お嬢さん。どうしたんだい？」

ミサト 「あの、私、大切な友達を探してしまって、方々を歩いて回ってるんです。目が見えない上に、行き慣れない場所にお足を伸ばしているもので、あっちこちぶつかったりして……。さっきなんかは、思いつきりコケちゃいました。」

田原本 「そう、それでそんなにボロボロに……。気の毒に。」

畝傍 「それで、その友達ってのはどんな友達なの？俺たちも探してあげようか？」

ミサト 「ありがとうございます。助かります。名前は『ストラビンスキー』って言うんです。」

畝傍 「ほうほう、『シユビデュビデュワワ。』ね。」

ミサト 「違います。」

田原本 「(畝傍を殴る) その……ストラビンスキー？それは外人さんかい？」

ミサト 「いえ、マルチーズです。」

畝傍 「え？チーズが友達？」

田原本 「(畝傍を殴る) マルチーズということは、犬かい？いや、ワンちゃんかい？」

ミサト 「ええ、ワンちゃんです。でも、私の唯一の大切な友達なんです。」

畝傍 「なんだ、犬か。(田原本に殴られる)・・・ワンちゃんか。ここでは、そんなシヤレた犬・・・ワンちゃんは見えないなあ。」

田原本 「そうだね、ここでは打ち捨てられた小汚い田吾作やら太郎・次郎やらが関の山だろうね。ちなみに、何か特徴はあるのかい？」

ミサト 「あの子、毛がフワフワしてて触り心地が良いんです。」

畝傍 「へえ、それで？」

ミサト 「歌が上手で。」

畝傍 「犬なのに歌えるんだ！」

田原本 「・・・歌を歌う？」

ミサト 「そうなんです。いつも私と一緒に歌ってくれるんですよ。」

田原本 「他に特徴あるんじゃない？もっと分かりやすい。」

ミサト 「ええ、あの子足が悪いんです。昔、私をかばって車にはねられてしまっって。」

田原本 「(小声で) やっぱり・・・。」

畝傍 「えっ？それって、ごん・・・。」

田原本 「(慌てて止めて)」

ミサト 「ごん？」

田原本 「ゴン！って音が鳴ったんじゃない？その時。」

ミサト 「あまりに怖くって覚えてないんです。まるつきり。」

田原本 「そうかい、それは可哀そうにねえ。(畝傍に小声で) ちょっと黙ってて。」

畝傍 「なんで？」

田原本 「いいから！」

ミサト 「どうしたんですか？」

田原本 「ん？大丈夫。こっちの話。そうだ、お譲ちゃんの名前聞いてなかったね？」

ミサト 「失礼しました。ミサトです。平群ミサト。」

田原本 「どこから来たんだい？もし、そのストラビンスキーらしきワンちゃんを見かけたら、知らせてあげるから。」

ミサト 「桜井町です。」

畝傍 「そんな遠いところから来てたんだ。」

田原本 「そうかい、それだったらそろそろ辺りも暗くなっちゃうし、ご家族も心配してるだろうから早く帰りな。」

ミサト 「はい、もうそんな時間ですか？（時計を触って）ホントだ。」

田原本 「これから帰るの大変だろうから、タクシーにでも乗って帰りな。代金は付いたら親御さんに払ってもらうなり何なりしてね。ウーさん、彼女の為にタクシー拾ってやりな。」

畝傍 「ああ。でもタクシーって、俺乗ったことないしどうやって止めるの？」

田原本 「タクシーに向かって手を挙げりゃいいだけだよ。」

畝傍 「そう。分かった。じゃあ、行こうか。」

ミサト 「お願いします。」

二人、タクシーのいる通りまで向かう

田原本、一人になって頭を抱え込む

田原本 「どうしたもんかねえ。もし、あの子を探しているのが権兵衛だとしたら、もともと彼女のところにいたわけだから、権兵衛は彼女のところに行ってしまう。ましてや、ナラさんは権兵衛を拾ってきて、勝手に住まわせてただけだし……。いや、保護してやったんだ。そして、手厚く看病もしてやったし、お互い今では楽しく暮らしてる。それに……。もうすでに家族じゃないか。ナラさんにとって大切なかけがえのない家

族なんだよ。引き離すわけにはいかないよ。そう、このことは黙っておこう。あの子も、二度とここには来れないだろうし。」

そこに平城山たちが帰ってくる

平城山 「何をブツブツ一人で言ってるんだ？変なもんでも食ったか？」

田原本 「ハッ！あれ、ナラヤン！えらく帰りが早いじゃないの？どうしたの？」

平城山 「早く帰っちゃダメなのかよ。」

田原本 「そう言うわけじゃないけど。」

平城山 「あの、ムツなんとかゴロウってオッサン、タダの動物好きだったよ。俺はてつきり獣医かなんかだと思ってたからよ。まあ、それより向かう途中から権兵衛の様子がおかしくてな。それで、早めに引き返してきた。」

田原本 「ああ、それはそれは・・・。」

平城山 「どうしたんだよ。さつきから変だぞ？」

田原本 「そうかい？」

そこに畝傍が意気揚々と帰ってくる

畝傍 「はあく、ちよつとセレブになった感じ。(タクシーを止める格好をして) こう、こうだもん。これで、車がキュキュツて止まるんだもん。あれ？ナラヤン早かったね。」

平城山 「おう、ちよつとな。それより、タクシーってなんだよ？そんなもん乗れる身分になったか？」

畝傍 「違うよ。俺は止めただけ。」

田原本 「あく！（畝傍を止めにかかる）」

畝傍 「なんだよ。(払いのける)」

平城山 「そうなんだよ。さつきから変なんだよ。」

畝傍 「やっぱり。さつきも三人で話してる時・・・」

田原本 「ウーヤーン！シユビデュビドゥー！」

畝傍 「そうそう、スタニスラフスキー。それと間違ってたんだよな、俺。」

田原本 「ああ、もう！」

平城山 「スタニスラフスキー？なんだよそれ。それに三人って、誰か来てたのか？」

畝傍 「そう、ミサトっていう若い女の子がね。探しに来てたんだ、そのスタニスラフスキーを。」

権兵衛 「(むくつと姿を現して) ミサト！？」

畝傍 「うん、ミサト。知ってるのか？そう言えば、権兵衛……」

田原本 「ああ！そう、そうだよ。探しに来たんだよ女の子が。でも、ちよつと違うよ、ウーさん。その子の名前は『ミサコ』で探してたのはストラビンスキー。ねえ、そうだったろ？  
(言いながら畝傍を小突く)」

畝傍 「そう、そうだったそうだった。ストラビンスキー。間違いない。しかし、難しい名前だよなあ。俺にはずつと、「シユビデュビデュワ、シユビデュワエ」って聞こえてたもん。でも、あの子の名前『ミサコ』だっけ？『ミサト』だったような気がするけど。さつき、タクシー拾う時もずつと『ミサトちゃん』て呼んでたし、彼女も普通に返事してたよ。」

田原本 「あら優しい子ね。ミサコちゃん、ウーさんが馬鹿なのを見透かして、合わせてくれたのね。きつと。」

畝傍 「そうなの？なんか納得いかないんだけど……。」

平城山 「全然さつきから話が見えない。」

田原本 「いいのいいの、ナラヤンは全く気にしなくて。権兵衛もね。」

このやりとりの間、様子がおかしい権兵衛  
取り乱している、もしくはうろたえている様子

平城山 「どうした？お前まで。」

権兵衛 「ミサト……ミサト……ミサト……ミサト……ミサト……」



畝傍 「ミサト・・・やっぱり、ミサトだよ。間違いない。」

田原本 「・・・・・・。」

畝傍 「それでさ、そのミサトって子が探してたのが、スタニス・・・じゃなくてストラビンスキーっていつて歌を歌うのが好きで、おまけに足が悪いんだって。ね？権兵衛に似てない？」

平城山 「それは本当か？どうなんだ、ババア。」

田原本 「いやあ、どうだろう？アタシは違うって思ってたけどなあ。(畝傍に) ほら、あの子言ってたじゃない。ストラビンスキーは毛がフワフワだって。権兵衛はどうよ？どう見たってフワフワじゃないじゃない。ね？」

畝傍 「そう、そうなんだよ。それだけが俺も引つ掛かってんの。だから、権兵衛ではないだろうなあって。」

田原本 「ほらあ、そうだろ？だからナラやんは気にしなくていいの。」

平城山 「ああ・・・・・・。」

田原本 「どうしたのさ・・・・大丈夫だって。」

権兵衛の様子や話の内容から、考え込む平城山

そこにミサトが戻ってくる

それを見止めた権兵衛は、固まっている

ミサト 「あの・・・・・・。」

田原本 「あれ？あれ？あれ？ど・ど・ど・ど・どうしたの？(畝傍に) どういうこと？」

畝傍 「ミサトちゃん！ミサコちゃんじゃないよね？ミサトちゃんだよね？」

ミサト 「はい。」

畝傍 「よかった。」

田原本 「そう言うことじゃないでしょ！アンタ、ちゃんとタクシーに乗せたんだよね。」

ミサト 「ちゃんと乗せていただきました。でも、忘れていたことがあって、運転手さんをお願いして戻って来たんです。」

畝傍 「忘れていたこと？なにそれ。」

ミサト 「ホント、私うっかり者で。ストラビンスキーを見つけていただいたら、ご連絡いただけるって聞いたのに、肝心の連絡先をお教えするのを忘れていて。」

田原本 「なんだそんなことだったの？それだったら、大丈夫よ。アタシの超能力でビビビーンと分かっちゃうのに。」

畝傍 「え？ババア、そんなことできるのかよ！」

田原本 「(畝傍をはたき、小声で) 鈍いっ！」

平城山 「(権兵衛の様子に気付き) 権兵衛……。」

田原本 「(ミサトに) ささ、今度はアタシがタクシーを捕まえてあげるよ。」

ミサト 「はぁ……。」

平城山 「ババア、待ちな。」

田原本 「へっ？」

ミサト 「あれ？他にも誰かいらっしゃるんですか？」

田原本 「ああ、気にしない。偏屈なジジイだから。」

平城山 「誰が偏屈だ。ちょっと、そのお嬢さんと話がしたいんだ。(ミサトに) アンタがミサトさんかい？」

ミサト 「はい。」

平城山 「そうかい……。俺は、平城山ってんだ。こいつらと、ここに暮してる。事のあらましは、こいつらから聞いた。聞いたと言っても、変に隠してやがるからハッキリとではないがね。」

ミサト 「はぁ……。もしかして、ストラビンスキーについて何か御存じなんですか？」

平城山 「(権兵衛を見やって) ストラビンスキーねえ。お前、よく知ってるんだろ？」

権兵衛 「!・・・ウワン・・・。」

ミサト 「はっ!・・・スト・・・。」

平城山 「(権兵衛を起こして) 探していたのは、こいつだろ？」

畝傍 「ナラやん、彼女は目が・・・。」

平城山 「そうか、そうだったのか。すまない。(ミサトを権兵衛のもとに連れて行き触れさせる) どうだい？」

ミサト 「(権兵衛にひとしきり触り、最後に頭に) このフワフワ・・・。」

畝傍 「フワフワか? どう・・・ぐはっ (田原本に鳩尾をきめられる)」

平城山 「どうやら、お嬢さんが探していたのはコイツに間違いないようだな。」

ミサト 「(感極まって) ゴメンね。ゴメンね。馬鹿な私を許してちょうだい。もう離したりなんかしないから。許して。ゴメンなさい。」

権兵衛 「(頑なになって) グググググ・・・。」

平城山 「何をそんなに固くなってんだ。ほら、ご主人だぞ。飛びついて行けよ。」

ミサト 「・・・まだ、怒ってるのね。ゴメンなさい。本当にあの時の私はどうかしていたわ。でも、本心じゃないの。分かって。」

畝傍 「何があつたんだい？」

ミサト 「ある日、散歩に出かけた時、些細なことで喧嘩になって、嫌いだって言っちゃたんです。もう会いたくなんかなくて。それで、私もわけが分からなくなっちゃって。いつもなら、この子の鼻に頼って散歩に出て帰ってくるんですけど、今どこにいるのか解らないまま一人帰ってしまったんです。私は、なんとか帰ることができたんですが、この子は帰ってこなくて。」

権兵衛 「ミサトが・・・ミサトが嫌いだって言っただもん。もう会いたくないって言っただもん。だから・・・俺も・・・嫌い。ミサトなんて嫌いだ！」

平城山 「そうか、そのまんま真に受けたのかお前は……。馬鹿か！」

権兵衛 「馬鹿じゃないやい！」

平城山 「よく彼女を見てみる。せつかくの綺麗な洋服をドロドロにまでして、靴がボロボロになってまで、お前を探してくれてたんだ。分かるだろ？」

権兵衛 「……わかんねえ。」

平城山 「思春期か！そんな強情になって何になるんだ？彼女は誠心誠意謝ってるだろ。受け入れてやれ。そして……帰ってやれ。」

権兵衛 「……ミサト。ゴメンね、帰るよ。」

畝傍 「権兵衛……。」

田原本 「ナラやん、アンタそれでいいのかい？アンタ、権兵衛を大層可愛がってたじゃないか。足が悪いのを治してやろうと、方々を回ってたんだろ？権兵衛が風邪をひいたとき、体を張って看病したじゃないか。……家族だって言っていたじゃないか。それでいいのかい？」

ミサト 「そうなんですか？」

平城山 「何を言ってるんだ。俺はこいつが居なくなると、清々するよ。飯も余計に用意しなくていいし、風邪をひいたときだって死なれちゃ処分に困ると思って……。それでだよ。良いんだよ。ほら、こんなホームレスの汚いオッサンといるより、ちゃんと家があって金のある家にいた方が幸せなんだよ。そうなんだよ。決まってるだろ？」

田原本 「(噛みつくように) 決まってるって、そんな……。」

権兵衛 「幸せだったよ。金がない平城山と一緒にでも幸せだったよ、俺は。楽しかったし、喧嘩もしたけど家族だと思ってたよ。俺は。」

平城山 「そうかい、それは残念なこったな。それじゃ明日から……。いや、今から家族じゃないな。さあ、本来の家族のもとに帰れ。迷子預かりは、もう終いだ。(畝傍に) ウーさん、すまないがリヤカーごと、またタクシーに乗れる場所まで彼女らを連れてやってくれ。」

畝傍 「ああ……でもいいのかい？」

平城山 「いいから・・・良いにきまつてんだろ。」

畝傍 「分かった。」

二人を連れていこうとする畝傍

突如、歌を歌い出す権兵衛

それは、いつも歌っていた曲

それを聞いていた平城山は、二人の日々を走馬灯のように思い出す

平城山 「いい曲だ。ホントに素直でいい曲だ・・・大丈夫だ。俺は、大丈夫だ。お前は、俺のココにいるからよ。大丈夫だ。お前は、しっかり彼女の目の代わりになってやれ。」

田原本 「ナラやん・・・。権兵衛、アンタのココにもナラやんがいるんだろ？」

権兵衛 「うん。」

田原本 「だったら、それをちゃんと自分で伝えてやりな。自分の言葉で。」

権兵衛 「・・・平城山。お前は、俺のココにちゃんと生きてるよ。今までの思い出全部残ってるよ。繋がってるよ。離れていても、ちゃんと繋がってる。ココでは近くにずっといる。背中に感じた温かみも、ふざけあった時の気持ちの高まりも、それに最初に会ってリアカーの上に乗せてくれた時の優しい顔も、全部全部忘れないよ。忘れられないよ。だって、平城山は俺の大切な家族なんだから。」

平城山 「権兵衛・・・いや、スタニス・・・いや、権兵衛。ああ、繋がってるよ。俺たちや、家族だ。田原本のババアも、畝傍のバカボンも、お嬢ちゃんの家族も皆まとめて、お前の家族だ。家族だ・・・家族だ・・・俺は、家族が持てたんだ。ありがとうな。ありがとう。」

権兵衛 「ありがとう。」

平城山 「何を柄にもないこと言ってやがんでい。笑わせんじゃねえよ。」

権兵衛 「平城山こそ、汚ねえ顔して泣くんじゃねえよ。」

平城山 「うるせえ！このワカメコンブが！」

権兵衛 「このシヨンベンちびりジジイが！」

笑いあう二人

田原本 「ホントに仲が良いんだから、この人たちは。ほらほら、今日はもう遅いから続きは別の日にやりな。何せ家族なんだからさ。彼女のご両親も心配してることだろうしね。」

権兵衛 「しよがねえな。今日はこの辺にしといてやるか。」

平城山 「それは、こっちの台詞だ。・・・おい、いつでも来て良いんだからな。お嬢ちゃんも、こんな汚いところだけど、俺たちとバカなことして笑いたかったら、いつでも来な。歓迎するよ。」

ミサト 「はい、ありがとうございます。幸運にも、汚いかどうか見えないんで、この子と一緒に遊びに来ます。」

畝傍 「ありや、上手いこと言うねえ。これは、一本取られましたかな？ナラヤン。」

平城山 「(幸せそうに満面の笑み) またな。」

権兵衛 「またな。」

畝傍に連れられて、二人出ていく  
いつもの場所には、田原本と平城山

田原本 「なんか、変な感じよね。少し寂しくなるけど、寂しくないと言うか・・・。嬉しいとまでは言えないけど、ねえ何だろね？この気持ち。」

平城山 「それは、前向きに後退したからじゃないか？」

田原本 「前向きに後退？なんかやけに、詩的だね。」

平城山 「そうか？そう感じたから、そう言ったまでだよ。」

田原本 「ナラヤン、変わったね。いや、変えられたんだろうね。」

平城山 「・・・『繋がってる』か。」

溶暗

ホームレス三人の日常

そこに訪ねてくる犬用車いすに乗った権兵衛とミサト・ミサトの母

その逢瀬は、幾度となく繰り返されていて、久しぶりに会った喜びというより、また会えたという当たり前の喜びに見える

楽しく話をしたり、ミサトの母が作ったであろう弁当を広げたり、音楽に合わせて踊ってみたり

そこに見えるのは、間違いなく幸せそうな家族である

形式的でもなく、うわべでもなく、心の手を繋いでいる家族である

完